

## 訳注『黄石齋集』第一集（1）

小 財 陽 平

本稿は、岡本黄石（一八一―一八九八）の漢詩集『黄石齋集』第一集に収録される漢詩に注釈を施してゆくものである。その一回目として、二〇首の詩作に施注を試みた。

岡本黄石は、詩文を梁川星巖に受け、書法を巻菱湖に学んだ。彦根藩家老として、桜田門外の変以降、混乱する藩内を立て直し、藩論を尊皇に導いた。維新後は新政府には出仕せず、家督を譲り、明治詩壇の重鎮として自適の生活を送った。

黄石の漢詩は、『黄石齋集』に収録されている。第一・二集が明治一四年（一八八一）、第三・四集が同一五年、第五集が同一八年、第六集が同二四年に順次刊行された。ほかに、写本でのみ伝わる『黄石齋遺稿』（『黄石齋集』第七集）がある。こちらについては、『漢詩人岡本黄石の生涯 第三章 三百篇の遺意を得る者』（世田谷区郷土資料館、二〇〇八）に翻刻がそなわる。

第一集は二冊二巻。題字（三条実美）、序文（川田甕江、小野湖山、谷鉄臣）、題詞（森春濤）、例言、鈴木寿画

「黄石先生林下行吟図」、黄石自題が続く。跋文は江馬天江による（序跋については、別稿を用意している）。

例言には次のようにある。

一 初編二巻係先生自弱冠至知命後之作。先生門地並高。執旧彦根藩政、凡二十年。未嘗一日廢文墨、所作詩殆垂一千首。惜其稿嘗罹兵燹、今所録僅十之二耳。故不能從編年体。（初編二巻は先生の弱冠より知命の後に至るまでの作に係る。先生 門地 並びに高し。旧彦根藩の 政 を執ること、凡そ二十年。未だ嘗て一日として文墨を廢せず、作る所の詩は殆ど一千首に垂んとす。惜しむらくは其の稿嘗て兵燹に罹り、今録する所僅かに十の一のみ。故に編年体に従ふ能はず。）

これによれば、「初編」すなわち第一集は、黄石の「弱冠」から「知命後」までの作品を収めているというが、第一集の最後の詩は「丁卯」になったもので、第一集は正確には天保元年（一八三〇）から慶応三年（一八六七）、つまり、黄石二〇歳から五七歳までに作られた詩を収めていることになる。

この第一集の草稿は、兵火によって焼失したため、全体の十分の一しか遺されておらず、また編年体の配列にすることができなかつたという。たしかに、配列は厳密な編年体にはなっていないようだが、しかしまったくの無秩序というわけでもなく、ゆるやかに制作年代順に並んでいるようである。

注釈を施すに際して、以下のような方針に従った。

- 一 底本には『詩集日本漢詩18』（汲古書院、一九八八）所収『黄石齋集』を用いた。
- 一 漢字は原則として現行の字体を用いた。ただし、漢詩文を掲げる際、「余・餘」「芸・藝」「弁・辨・辯・瓣」「欠・缺」等、誤解する可能性のある文字にかぎり、正字体を用いた箇所がある。
- 一 適宜ルビを振った。書き下し文へのルビは、原則として歴史的仮名遣いを用いたが、字音語には現代仮名遣

いを用いた。

一 各作品には通し番号を付した後に、詩題の原文、続いてカッコ内に書き下し文を掲げた。連作の二首目以降で、詩題のないものは、「(其二)」などと記した。

一 上段に漢詩原文を、下段にその書き下し文を掲げた。続いて、詩体、韻字（韻目）を示した。

一 【題意】には、詩題についての説明や制作年次、詩の内容を記した。

一 【語釈】には、詩語の意味や用例を掲げた。用例は、黄石が下敷にした作や参考にしていたであろう作、また同じ用法のものを掲げた。なお、用例は原則として書き下し文のみを掲げ、詩文の題は原文のみとした。

一 【通釈】は直訳を旨としたが、必要に応じて、文言を補って解釈した。

一 必要に応じて、【余説】欄を設け、各氏の評語を紹介するなど、作品鑑賞に資すると思われる情報を掲げた。

評語については、原文・書き下し文ともに掲げた。

小籠残藁 上

0001 夏日書懷三首（夏日書懷三首）

考槃風味在吾廬 こうはん ふうみ 吾が廬に在り

草滿閑階亦不除 草は閑階に満つるも亦た除かれず

睡起看山過雨後 ねむりより起きて山を見る 過雨の後

詩成題竹試茶餘 詩成りて竹に題す茶を試みるの餘

時平猶自論兵略 時平らかにして猶ほ自ら兵略を論じ

日永唯能閲道書 日永くして唯だ能く道書を閲す

寡欲清心聊復爾 寡欲清心聊か復た爾のみ

何須屏跡混樵漁 何ぞ須るん跡を屏めて樵漁に混るを

七言律詩 韻字 廬・除・餘・書・漁（上平声六魚）

【題意】 天保元年夏、黄石二〇歳の作。天保二年一月、彦根を訪れた菊池五山は、黄石と面会している。これを機縁として、五山は本連作を『五山堂詩話』補遺巻四で紹介した。夏の日の胸中を記した、三首の連作の第一首目。暑を避けて、別荘での閑適の情をほしいままにした、隠遁の楽しみを詠じたもの。黄石が青年期より出世間的の志を抱いていたことがわかる。

【語釈】 ○考槃 隠遁の楽しみをなすこと。賢者の隠逸を楽しむ様を詠じた「考槃」（『詩経』衛風）に基づく語。『毛伝』は「考は成なり。槃は楽なり」とし、『集伝』では「考は成なり。槃は盤桓の意なり。言ふところは、其の隠処の室を成すなり」とする。 ○風味 すぐれたおもむき。「淵明は千載の人、子瞻は百世の士、出処固より同じからずも、風味亦た相似たり」（『冷斎夜話』巻七）。 ○閑階 人がなく静かな階段。庭に階段があつて、そこを草がおおっていたのだろう。 ○題竹 竹に詩を書きつける。李山甫「方千隱居」（『三体詩』）に「欄前竹に題して僧名有り」とあるように、訪問客が竹に詩や名を書くことがあるが、ここでは自作の詩を書いた。 ○試茶 茶を味わった後。「餘」は「あと、のち」。 ○論 分析する。研究する。 ○猶自 太平の御代でさえ自然と。 ○兵略 戦における兵の動かし方や戦略。黄石は、彦根藩軍学師範を代々勤める、岡本業常の養子となり、文政五年に跡を継いだ。兵術研究はその家業であつた。 ○道書 道家の書。あるいは仏典のことも指す。いずれにしても、世俗を脱した玄妙な思想書をいう。 ○聊復爾 とりあえずこうしておこう、まあこんなところ

だ、の意。完全に隠遁するのではなく、ほどほどに世俗と折り合いをつけながら、機を見て隠宅に休らう現今の状況にとりあえず満足しようとする妥協的態度。華美な衣類を干して自慢する俗習に対して、阮咸がふんどしをぶらさげてみせた。そのことを問われると、「未だ俗を免るる能はず。聊か復た爾のみ」と答えたという『世説新語』任誕に基づく語。○樵漁 木こりと漁師。俗世を離れた隠者を象徴する。

【通釈】 隠居暮らしの醍醐味は我が庵にある。草はひっそりとした階段に生え放題だが、それも気にしない。昼寝から覚めると雨上がりの山を見つめ、詩ができると茶を喫してから竹に書きつける。太平の御代でさえおのずと兵術のことを考えてしまうが、夏の日永にはただ道書に目をさらすだけ。何も望まぬ代わりに、心は澄み切っているが、とりあえずこんなものだろう。ことさらに姿をくらませて、木こりや漁師に混じるまでもあるまい。

【余説】 巻頭を飾る本連作は、彦根に來遊した菊池五山の目に留まり、その『五山堂詩話』補遺巻四にて「文卿（黄石）其（父）の業を殞さず、文武兼濟、今纔かに弱を過ぐるのみ。実に誉髦と為す。夏日書懷に云ふ……」として紹介された。詩人を志すものならば、『五山堂詩話』に名を列ねることを無上の名誉としたくらいであったから、これにより、黄石青年の詩名が天下に知られることになったに違いなく、そういう意味では、詩人黄石はこのとき誕生したといつてよい。本連作が詩集の冒頭に据えられたゆえんである。

ただし、『五山堂詩話』とは、以下のような若干の文字の異同が確認でき、別集刊行に至るまでに、推敲に余年のなかつたことをうかがわせる。

- 2 草滿閑階不肯除↓草滿閑階亦不除
- 3 睡起看山収雨後↓睡起看山過雨後
- 4 詩成題竹納涼初↓詩成題竹試茶餘

5 時平猶自存兵略↓時平猶自論兵略

6 日永無聊、閑道書↓日永唯能、閑道書

7 寡欲清心、真得所↓寡欲清心、聊復爾、

いずれも平仄に不審な点はなく、これはよりよい表現を目指しての所為だといえる。事実、庭の草を「あえて抜かない」とうそぶくのは、ことさらに隠宅めかした気取りを感じさせるし、「雨が収まる」よりも「雨が通り過ぎた」としたほうが、躍動感が出る。雨が降れば気温が下がるのは当然なのだから、「納涼」という詩語はたしかに不要である。ここは茶を啜ってから詩を書きつけたほうがつきづきしい。軍学師範の家を継いだ黄石からすれば、太平の御代でも習慣によっておのずと兵略のことが意識を離れなかったはずだ。「存兵略」では、どうしても他人事のような口ぶりになる。「無聊」と表現すれば、脱俗の生活に不満があるかのように聞こえるし、これでは暇つぶしに「道書」を繙いた仕儀となる。日が永くても気にならないぐらいのめり込めるのは「道書」だけと、玄妙な書物に対する敬意を示した表現に改めたほうがよい。それに「猶自」と対応させるのならば、「無聊」よりも、同じ副詞の「唯能」のほうが緊密な対句を形成できる。「真得所」は、いかにもストレートな言い回しで詩歌としての面白みにやや欠けるだろうか。「聊復爾」とすれば、世俗にそむききるでもなく、かといって隠逸の志を棄てきったわけでもないという、複雑なニュアンスが帯びて、余韻が生じよう。

菊池五山の紹介によって世に知られることになった本作は、どのように評価されただろうか。版本には次のような各氏の評語が掲げられている。

小野湖山は「読開卷二律、先見其詩品。又足以見其人品矣（開卷の二律を読み、先づ其の詩品を見る。又た以て其の人品を見るに足る）」と評している。幕末には藩家老として辣腕を振った黄石だが、維新政府に仕えるこ

とのなかつたかれが本来志していたのは、廢藩置県以降の隱遁生活にあつたことを、本作から読み取っている如くである。

大沼枕山は「睡起二聯、意思瀟然。已伏第七句寡清二字（睡起の二聯、意思瀟然たり。已に第七句の寡清二字を伏す）」とする。枕山の慧眼は、雨後の山を見つめ、茶を喫して詩を題する隱棲生活を活写した頷聯が、第七句目の「寡欲清心」と脈絡を有していることを見抜いたのである。

0002（其二）

適然時入黒甜郷

適然として時に入る 黒甜郷

個裡真成興味長

個の裡 真成に 興味長し

詩瘦祗応同沈約

詩瘦は祗だだ応に沈約に同じかるべし

性慵元自似嵇康

性慵は元自り嵇康に似たり

門無襜褕奚知熱

門に襜褕無きも 奚んぞ熱を知らんや

床有篋箚可飽涼

床に篋箚有り 涼に飽くべし

胸次久忘榮達事

胸次久しく忘る 榮達の事

夢魂不復到黄梁

夢魂復た黄梁に到らず

七言律詩 韻字 郷・長・康・涼・梁（下平声七陽）

【題意】 連作の二首目。隱宅での午睡の楽しみを詠じた作。陶淵明の「嘗て言ふ 夏月虚間、北窓の下に高臥し、清風 颯として至らば、自ら羲皇上の人と謂はん」（「陶潜歸去」『蒙求』）以降、夏の午睡は隱者の楽しみとして

定着した。

【語釈】 ○適然 偶然。 ○黒甜郷 昼寝、夢の世界、の意の俗語。「南人は飲酒を以て軟飽と為し、北人は昼寝を以て黒甜と為す。故に東坡云ふ、三杯軟飽の後、一枕黒甜の餘と。此れ亦た俗語を用ゐるなり」(『詩人玉屑』巻六)。

○個裡 このなかに。ここでは、夢幻郷のなかに、の意。「此中」に同じ。隠逸の境地を詠じた陶淵明の「飲酒二十首(五)」(『古文真宝』前集)に「此の中に真意有り、辯せんと欲して已に言を忘る」。

○真成 ほんとうに、の意の俗語。王昌齡「長信秋詞」(『唐詩選』)に「真成に薄命久しく尋思す、夢に君王に見えて 覚めて後に疑ふ」。

○詩瘦 苦吟によつて瘦せること。黄庭堅「王立之承奉詩報梅花已落尽次韻戲答」にある「定めて是れ沈郎詩を作りて瘦せたるならん、応に春の能く許の愁ひを生ずべからず」を踏まえた。これは王立之を沈約になぞらえ、かれは春愁によつて瘦せたのではなく、苦吟によつて瘦せたに違いないと戯れた作。沈約は病弱で瘦せていたのだが、黄庭堅はこれを苦吟によるものと読み換えたのである。そのように読み換えたのは、李白「戲贈杜甫」に見える「借問す 別来 太だ瘦生せたるか、総て従前作詩の苦しみの為なり」に基づく。

○沈約 南朝梁の文人、政治家。 ○性慵 怠惰な性質。嵇康は自身の性質を「性復た疎懶、筋は驚く肉は緩く、頭面は常に一月に十五日洗はず」(『与山巨源書』)と「疎懶」だと述べている。白居易「秋齋」に「嵇康事に向ひて慵し」。

○嵇康 三国魏の文人。竹林の七賢の一。 ○榼穢 竹製の骨に帛を張つた日傘。陸游「夏日」に「赤日黄塵 榼穢忙し」。

○床 中国で用いられた、腰掛けたり、寝転んだりするための家具。寝椅子やベンチのようなもの。ここでは縁側や縁台のことをいう。

○籬菊 竹むしろのような植物で編んだ敷物を指すか。見慣れぬ詩語だが、南宋の范浚という人の「送徐彦思倅建安」詩に「君聞かずや 詩人一席籬菊に眠り、夜泊す 建溪微月中」とあって、眠るときに「籬菊」を敷いている。「籬菊」も似たようなものらしく、中唐の欧陽詹の「宿建溪中

宵即事」詩に「蔭翳一席眠り還た坐す」とあつて、やはり莫塵もじんのような敷物を指すようである。○飽あ ぞんぶんに味わう。満喫する。○黄梁きび 黍きび。ここでは「黄梁一炊の夢」(『沈中記』)の故事を踏まえる。盧生ろせいが邯鄲かんたんで榮達を遂げるが、それは黄梁が炊けるわずかの時間に見た夢の出来事であつた。そこから、榮耀榮華も東の間のほかないものだという寓話。

【通釈】 たまたまつい夢幻郷に引き込まれるが、このうちにこそほんとうの興趣がある。起きていれば、苦吟して沈約よろしく痩せこけてしまふし、性質はもとより嵇康の如く懶墮にできている。眠っていれば、出入り口に日除ひよけを設けなくても暑さなど感じないし、竹むしろを敷いて寝れば、ひんやりとして申し分ない。世俗での榮達など久しく忘れていたから、盧生が見たというはかない夢の世界には決して向かうまい。

【余説】 世俗の煩わしさを忘れさせてくれる午睡のすばらしさを語つた作。黄石は、自身を沈約や嵇康になぞらえている。沈約は文苑の第一人者として認められながらも、最期は武帝の不興を買い、不遇のうち歿したし、魏王室に列なる嵇康は世俗を斥けつづけながらも、結局讒言によつて刑死した。どれだけ詩文に耽り、脱俗の境地に没入していても、生きていく限りは意に任せない世の中であるならば、眠りこけるよりほかはないという、青年黄石のいささかませた、達観してみせたような印象を受ける作である。

用語としては、「黒甜郷」「真成」「椎穢」「籛籛」など、俗語的表現を多用した点が目を引く。構成の面では、「黒甜」からはじまつて「黄梁」でおわるというように、色彩語で首尾を整えたのは意識してのことだろう。

小野湖山は、本詩に対して、「清淡和雅。誦之亦可忘熱飽涼(清淡和雅。之を誦すれば亦た熱を忘れ涼に飽くべし)」と評している。

なお、『五山堂詩話』と比較すると、次のように冒頭と末尾の句に文字の異同が見られる。

1 有時、来去、黒甜郷 ↓ 適然、時入、黒甜郷  
8 繁華、不復夢、黄梁 ↓ 夢魂、不復到、黄梁

いずれも作詩の規則に抵触する箇所は見られない。

0003 (其三)

槐柳扶疎蔭更稠 槐柳扶疎として蔭更に稠し  
閑窓独坐不勝幽 閑窓独坐して幽に勝へず

除詩之外我無事 詩を除くの外我に事無く

経国有材誰用籌 国を経むるに材有り誰か籌を用ゐんや

身後榮名悲馬骨 身後の榮名馬骨を悲しむ

世間躁進笑擧頭 世間の躁進擧頭を笑ふ

散擣羸得生花吻 散擣羸ち得たり生花の吻

千首真輕万户侯 千首真に輕んず万户の侯

七言律詩 韻字 稠・幽・籌・頭・侯 (下平声十一尤)

【題意】 連作の三首目。世俗の榮達には背を向けて、詩作に耽る隱逸の境地に思いを馳せた。

【語釈】 ○扶疎 樹木の葉がしげり広がる、の意。疊韻語。陶淵明が「讀山海經」(『古文真宝』前集)に「孟夏草木長じ、屋を繞りて樹扶疎たり」と詠じて以降、扶疎たる草木に囲まれるのが隱宅のならいとなった。黄石の別宅に生うる「柳」はまた、陶淵明が自身の草庵に五本の柳を植えたという「五柳先生伝」(『古文真宝』後集)を意

識していよう。○閑窓 ひっそりとした窓際。真夏の午後に「北窓」のもとで昼寝した陶淵明の「陶潜帰去」

〔「蒙求」を意識した措辞(0002詩・題意参照)。○不勝幽 たいそう静かでひっそりと落ち着いている。

「不勝……」は「非常に……である」の意。○除詩之外 詩を作ることを除いて。○経国 世を治め、国家を

統治すること。「文章は経国の大業、不朽の盛事なり」(曹丕『典論』論文)。○用籌 計略を用いる。「籌」は、

数をかぞえる竹の棒のことで、転じてはかりごとをいう。○馬骨 馬の骨。賢者を招く目的でおとりのために優

遇される無能な者、の意。千里の馬を求めるために、死馬の骨を五百金で買った者がいた。死んだ馬に五百金を払

うぐらいだから、生きた馬ならよほどの高値がつくだらうと、名馬がたくさん寄せられたという。いわゆる「死馬

の骨を買ふ」(または「先從隗始」とも)の故事(『十八史略』春秋戦国・燕)を踏まえる。○蹶進 盲目的に突

き進むこと。○聾頭 聾頭鼠目のこと。ノロジカの頭とネズミの目、転じて野人の卑しい容貌。頭は削げ、目

は凹んで瞳が円い相貌をいう。○散樗 使い物にならない樗の木。「吾に大樹有り。人之を樗と謂ふ。其の大

本は擁腫して、繩墨に中らず、其の小枝は巻曲して規矩に中らず、之を塗に立つれば、匠人顧みず」という

『莊子』逍遙遊の一節に基づく。役に立たないが、それ故に伐採されることもなく、天寿を全うできる、いわゆる

「無用の用」のこと。無能であるが故に隠宅で安穩とできる黄石自身の身の上をいう。○羸得 手に入れられた、

の意。○生花吻 花への口づけ。○万户侯 食邑一万户の領主。高官高禄の象徴。末句は、杜牧「登池州九

峰楼寄張祜」に「誰人か似たるを得ん張公子の、千首の詩もて万户の侯を軽んずるを」とあるのを踏まえる。

【通釈】 エンジュやヤナギの葉がふさふさとひろがって、木陰はいっそう濃くなった。静かな窓辺に独り坐してい

ると、この上ない閑寂さだ。自分には詩を作るぐらいしかやることはなく、適材はほかにいくらかもあるのだから、

天下を治めるために、ない智慧を絞ろうともしない。死後に名声を博したところで、悲しいことに、それは千里の

馬を招きよせるための馬の骨に過ぎないのだ。むやみに前へ前へと突き進むこんな世の中では、野暮な人間は笑い物になるだけだ。役立たずの樗木だからこそ、生き生きとした花々に接吻することができるのだ。自分には、いつでも詩を詠んでいられるこの閑雅な身のほうが、食邑一万戸の領主などになるよりも、よほどありがたく感じられるのである。

【余説】『五山堂詩話』と比較すると、一文字異同が見られる。

2 山窓独坐不勝幽↓閑窓独坐不勝幽

どちらの文字も平仄は同じであるが、「山窓」とすると、遠く離れた世俗との距離に焦点が向けられることになり、「閑窓」とすると、隠宅の静けさが強調されることになる。

0004 早春題清暉亭用星巖先生韻（早春清暉亭に題す。星巖先生の韻を用ゐる）

柳覃晴煙弘曲欄 柳は晴煙に罩められて 曲欄を弘ひ

孤亭瀟灑俯沙湾 孤亭 瀟灑として 沙湾に俯す

湖光内外夕陽敞 湖光 内外夕陽敞く

山色高低残雪斑 山色 高低残雪斑たり

十丈紅塵無夢到 十丈の紅塵 夢にも到る無く

一双白鳥対人閑 一双の白鳥 人に対して閑なり

只応便詔多清福 只だ応に 便ち清福多きを詔るべし

未必仙家勝此間 未だ必ずしも仙家も此の間に勝るとせず

## 七言律詩 韻字 欄・湾・斑・閑・間（上平声十五刪）

【題意】 詩人また尊皇家として知られる梁川星巖は、天保元年一〇月、彦根を訪れた。一時的に京都にいたこともあったが、天保三年九月まではおおむね彦根で過ごしている。黄石はその間、いくたびか星巖と対面し、詩歌の応酬をしており、本作はおそらくそのころの作か。本詩は、黄石が星巖の用いた韻字を使って、清暉亭のすばらしさを詠じた寄題の作。「清暉亭」は、詩を読むかぎり、琵琶湖の湾に面した高所にあつて眺望のよい亭榭であるとわかるが、詳細は不明。「用韻」は、和韻の一種で、相手の詩と同じ韻字を用いて作詩すること。韻字の順序までそろえる次韻と異なり、用韻では順番までは問わない。黄石がなにゆえ星巖の詩に和したのか、その場に星巖がいたからなのか、星巖の勧めで清暉亭を訪うたからなのか、単に星巖のことを思い出したからなのかはよくわからない。『星巖集』丙集「蝨湖客漁」には、黄石に寄せた作がいくつか見えるが、そのなかに本詩と用韻の関係にある作は見いだせなかつた。

【語釈】 ○罩 雲や霧が立ち籠める。司空図「王官二首（二）」に「荷塘 煙は罩めて小齋虚しく、景物皆な宜しく画図に入るべし。尽日人無く只た高臥す、一双の白鳥紗厨を隔つ」。○晴煙 晴れた日の春霞。琵琶湖の水蒸気が霞となった。「煙」は、霧や霞などの水蒸気を指し、けむりのことではない。○払曲欄 枝垂れ柳の枝が風に揺られて、曲がった手すりに当たる様子をこう表現した。温庭筠「春愁曲」に「柳は赤欄を払ひて織草長し」。○孤亭 ぼつんとたたずむ亭榭。○瀟灑 俗っぽくなく、こざっぱりとして、洗練されている様子。白居易「徵秋税畢題郡南亭」に「南亭 日び瀟灑たり、偃臥して疎頑を恣にす」。○俯 見下ろす。俯瞰する。清暉亭が見晴らしのよい高みにあつたことがわかる。○湖光 夕陽に輝く湖面。○敞 広々として遮るものがない様子。清暉亭からの眺望は、湖面に沈みてゆく夕陽の広大なパノラマが展開されたのである。○十丈紅塵

十丈もの塵埃が巻き起こる繁華の地。「二丈」は、時代によって若干異なるが、およそ三メートル。「紅塵」は、車馬が起す塵や土埃のこと。陸游「題橋南堂図」に「道上の紅塵 高さ十丈」とあるように、詩歌でしばしば用いられる誇張表現。○一雙 一對の。黄順之「題岩龕寺」(『聯珠詩格』)に「日暮 溪深くして 人渡らず、一雙の白鳥 林に傍そばうて 帰る」。○白鳥 ここではコハクチョウを指す。冬、初春にかけて北方より飛来し、琵琶湖で越冬する渡り鳥。カモメやハクチョウなどの水鳥が人間を恐れられないのは、その人間の心に邪念がないことを表す。いわゆる「海翁好鷗」(『列子』黄帝)を意識した措辞。○詔 ほこる。○清福 俗気がなく、閑雅な状態でいられる幸福。○仙家 仙人の住処すまか。

【通釈】 春霞に包まれた枝垂れ柳が曲がった欄干を払っている。ぽつんとたたずむこの清暉亭は、こざっぱりとして入り込んだ砂浜を見下ろしている。湖の内も外もひろびろとして夕陽に照り輝き、山は高さも低きもまだらの雪に彩られている。ここにいれば、繁華の地など夢見ることさえなく、一對の白鳥が人間のそばをゆつたりと泳いでいる。閑寂さにひたれるよろこびにただただ得意になって、仙人の住処すまかでさえもここには勝るまいと思われればかりである。

【余説】 大沼枕山は、本詩に対して、「終篇不細鎖、自是大家之筆(終篇 細鎖ならず、自おのづからはれ大家の筆なり)」と評している。繊弱に墮せず、重厚な寄題の作たりえていることを称したのである。小野湖山は、「居然星翁中年風格(居然として星翁中年の風格なり)」と評している。これは、二〇歳そこそこの黄石がすでに星巖中年の円熟味を有しているといったもの。両者ともに、黄石が青年時代より大人びた作風に至っていたとの見解を呈している。

本詩は、星巖との関わりを有する、黄石の作品としては、もっとも初期の作の一つである。そういうこともあってか、星巖門下生の詩作を収録した『玉池吟社詩』の巻頭に据えられている。例によって文字に異同が見られるの

で、以下に掲げておく。

1 千里風煙湖上山 ↓ 柳罩晴煙 曲欄

2 孤亭晴枕 綠楊湾 ↓ 孤亭瀟灑 俯沙湾

7 便応自詔多清福 ↓ 只応便詔多清福

0005 春日感懷二首（春日感懷二首）

滾滾街塵漲軟紅 滾滾たる街塵軟紅を漲らせ

奔車走馬漫西東 奔車走馬漫に西東

豈能掉舌為樓護 豈に能く舌を掉ひて樓護と為らんや

且擬回心学塞翁 且く擬す心を回らせて塞翁を学ばんと

閱易夜聽春館雨 易を閲して夜に聴く春館の雨

鶯花曉立古堤風 花を鶯ぎて曉に立つ古堤の風

此生未是全無事 此の生未だ是れ全くは無事ならず

愧爾沙辺水勃公 愧づ爾沙辺の水勃公

七言律詩 韻字 紅・東・翁・風・公（上平声一東）

【題意】 春の日の感慨を詠じた作品。天保年間の作。弁舌の才を振るって権力者に取り入ることもできない性分ゆえに、いつそのこと世俗の榮達を諦め、無為自然の境地に達したいと念じるものの、それも果たせず、身の振り方に思い悩む、苦しい胸の内を歌った。

【語釈】 ○滾滾 よどみなく、次から次へと発生する様。 ○軟紅 舞い上がる塵。都会の繁華をいう語。ここで

は、彦根の城下町を指す。 ○奔走走馬 走り回る車と馬。都会の雑踏をいう。陶淵明「飲酒二十首（五）」（「古

文真宝」前集）に「廬いほりを結びて人境に在り、而も車馬の喧かまひしき無し」。 ○漫西東 むやみに西へ東へと往来す

る。「漫」は、無意味に、ずずるに。 ○掉舌 弁舌さわやかに話すこと。また、権力者に遊説してまわること。

○樓護 前漢の游侠の徒。弁舌の才にすぐれ、各地の有力者はこぞって交わりを結ぼうと競い合ったほどで、当

時、長安では「谷子雲の筆札、樓君卿の唇舌」（『漢書』游侠伝）と称された（「君卿」は樓護の字）。 ○且擬 と

りあず……しようとする。 ○回心 心を変える。 氣持ちを改める。 ○塞翁 中国北辺に住まう老人。幸不幸は

予測できないので、一喜一憂するには及ばないという「人間 万事塞翁が馬」（『淮南子』人間訓）の故事に拠る。

○易 『易経』。五経の一つで、占いの書。未来がどうなるか見通せないで、占いの書に頼ろうというのである。

○未全 いまだすべてが……というわけではない、の意。部分否定を表す。 ○無事 何かをなそうとしない。

無為。ことさらにたくらむことを戒め、ありのままの自然な状態を重んじた道家思想において、理想とされる境

地。 ○愧爾 あなたに対して恥ずかしい、の意。高適「人日寄杜二拾遺」（『唐詩選』）に「愧はづなんぢ 爾 東西南北の

人」。 ○水勃公 水鳥の名。陸龜蒙「和襲美松江早春」に「一生 無事にして 煙波足る、唯だ沙辺の水勃公有る

のみ」とあるのを踏まえ、自分はいまだ「無事」ではないので、「水勃公」に対して恥ずかしいといった。『列子』

黄帝に見える、カモメと戯れた青年の話以来、水鳥は隠逸を象徴する生物として用いられている。

【通釈】 絶え間なく舞い上がる土埃が繁華の地に立ち籠め、車馬はむやみに西へ東へと往来する。弁舌を振るって、

権力者にかわいがられたという、樓護になどなれようはずもなく、まずは心を入れ替え、目先の幸不幸にとらわれ

なかったという、あの塞翁でも見習うことにしよう。『易経』を手に取って、身の振り方をあれこれ思い悩んだま

ま夜を迎えると、折しも降りはじめた春雨の音に耳を澄ます。明け方になると、花の香りを嗅いでは、風に吹かれながら古い土手を行く。わが処世はいまだ完全には無為自然とはいえない状態にあるから、悠々たる砂辺の水鳥よ、あなたに対して恥ずかしいかぎりである。

【余説】 この作でも、世俗に背を向けて、隱逸の境地を志向する姿勢がうかがえる。しかし、思い切って、藩土を辞することもできかねる自身の優柔不断ぶりに忸怩たる思いを抱えていたのであった。

なお、『玉池吟社詩』と比較すると、次の三箇所に異同が見られる。

- 1 袞、袞街塵漲軟紅↓滾、滾街塵漲軟紅
- 6 鶯花曉立古隄、風↓鶯花曉立古堤、風
- 7 餘、生未是全無事↓此、生未是全無事

0006（其二）

此心久与世相違

此の心久しく世と相違ふあひたが

壹鬱春襟説向誰

壹鬱たる春襟、誰にか説かんいっうつ しゅんきん たれ

百舌鳥嘩争暖樹

百舌の鳥は、嘩しくして暖樹を争ひひやくぜつ かまびす だんじゅ

一枝花瘦傍疎籬

一枝の花は瘦せて疎籬に傍ふいっしげ や そり

廟堂無路薦周頌

廟堂路無し、周頌を薦むるにびやうどう みち しゅうしやう すす

痛飲且須歌楚辞

痛飲、且く須く楚辞を歌ふべししばら すべから

幾度臨流弔孤影

幾度か流れに臨みて孤影を弔ふいくたひ いくたひ とむら

不堪懷古淚連沍 堪へず古へを懷ひて涙連沍たるに

七言律詩 韻字 違・誰・籬・辭・沍 (上平声四支)

【題意】 連作の二首目。一首目に統いて、春愁をかこつた作だが、後半において屈原の面影を点綴する。讒言によって君主に疎んじられた屈原を持ち出したあたり、単なる春愁を詠じたのではなく、彦根藩内で意を得られなかったために憂鬱な思いを抱いていたことを想像させる。

【語釈】 ○世相違 世俗と背き合っている。杜甫「曲江对酒」(『唐詩選』)に「縦飲久しく拚して人共に棄て、懶朝真に世と相違ふ」。 ○壹鬱 憂いいきどおる様。賈誼「弔屈原賦」(『古文真宝』後集)に「子独り壹鬱として其れ誰にか語らん」。 ○春籬 春の日の感慨。春愁。崔塗「鸚鵡洲眺望」(『三体詩』)に「悵として望めば春籬鬱として未だ開かず」。 ○向 方向を表す助字。「於」に同じ。 ○百舌鳥 モズ。モズは早春より求愛行動の一として盛んに啼きだす。 ○争暖樹 陽光の当たる暖かい樹木に陣取ろうと争うこと。白居易「錢唐湖春行」に「幾処の早鶯暖樹を争ふ」。「伐木」(『詩経』小雅)以来、樹に止まり、鳴き交わす鳥たちの姿は友情を象徴するが、ここでは、群れ集うモズが「暖樹」を争っているとすることで、仲間同士でかましく争っている俗人の様子を示している。 ○疎籬 すきまの多い垣根。疎籬にひっそりと咲く、瘦せ衰えた一本の花は、黄石その人を暗示する。 ○廟堂 大廟の殿堂。転じて、朝廷を指す。ここでは、皇室のことをいう。 ○周頌 『詩経』三頌の一。周王朝の祖廟を祀った楽章。転じて、朝廷の頌歌をいう。ここでは、皇室への熱誠が込められた詩歌のこと。 ○且須 一時的にでも……しなくてはならない。皇室への賛歌を捧げる手段がないので、一時的に「楚辭」を詠じて、慰めようというのである。李白「将進酒」(『古文真宝』前集)に「主人何為れぞ錢少しと言はん。且く須く酒を沽ひて君に対して酌まん」。 ○楚辭 戦国楚の屈原らの作品を取めた総集。忠を尽くしたにも

かわからず、讒言によって、朝廷を逐われ、汨羅に投死した屈原の憂愁の念に満ちた作が多い。○臨流 川の流

れに向き合う。ここでは、芹川のことを指すか。屈原「九章（四）」（『楚辞』）に「流水に臨みて太息す」。○弔

孤影 自身の孤独な影法師を自分で慰めることだが、ここでは川面に映った自身の姿を「孤影」といった。その上で、この「孤影」に汨羅で投死した屈原の姿を重ね合わせている。懷王に忠を尽くしたにもかかわらず、疎んじられた屈原に自己投影しているのである。白居易「晚秋夜」に「月裏愁人孤影を弔ふ」。○懷古 かつての出来事を思い返すこと。ここでは、屈原の入水をいう。○連瀉 涙を流す様。

【通釈】 わが心は長らく世俗と相容れないことだった。この春の日の結ばれたる憂いの情を誰に向かって吐露しようか。モズは陽の当たる樹をめぐってかまびすしく啼きわめいているが、一枝の花は瘦せ細って、まばらな垣根のそばで咲いている。朝廷に頌歌を捧げようにもその手立てがないのであれば、痛飲してひとまず『楚辞』を歌っておくつもりだ。いくたびかこの川の流れに面して、川面に映った自身の姿を慰めているが、かつて懷王に忠を尽くすも報いられず水死した屈原を思えば、それが我が事のような気がして涙が滂沱と流れてくるのにはたえられない。

【余説】 黄石が藩内で意を得ず、いささか窮屈な思いをしていたことを想像させる一首。かれの鬱屈の詳細は不明だが、「廟堂路無し 周頌を薦むるに」という嘆声から察するに、譜代大名の筆頭たる彦根藩内では、朝廷に対する黄石の熱誠は容易には理解されなかつたのであろう。

なお、『玉池吟社詩』と比較すると、次のような異同が見られる。

3 百舌鳥喧争暖樹↓百舌鳥嘩争暖樹

0007 秋夜読九歌 (秋夜九歌を読む)

奈此秋風蕭索何

此の秋風の蕭索たるを奈何せん

空江木落月明多

空江木落ちて月明多し

時清那用懷孤憤

時清ければ那ぞ用ゐん孤憤を懐くを

宵永唯宜誦九歌

宵永ければ唯だ宜し九歌を誦するに

楓樹夜猿悲欲斷

楓樹夜猿悲しみて断たんと欲し

女羅山鬼語相和

女羅山鬼語りて相和す

五更捲卷恍無寐

五更巻を捲くも恍として寐ぬる無し

心遠天南湘水波

心は遠し天南湘水の波

七言律詩 韻字 何・多・歌・和・波 (下平声五歌)

【題意】 天保年間の秋の作。秋夜、屈原の「九歌」(『楚辞』)を読んで詠じた作。前作に続いて『楚辞』が登場する。このころ黄石にとつて、『楚辞』は座右の書であったことがうかがえる。

【語釈】 ○奈……何 ……をどうしようか。どうしようもない。手段の疑問詞だが、しばしば反語となる。○蕭

索 蕭条として物寂しい様。王維「戲贈張五弟諱三首(二)」に「秋風自ら蕭索たり、五柳高く且つ疎なり」。

○空江 広々として静かに澄み切った川。賈島「早秋寄題天竺靈隱寺」に「山鐘夜に渡る空江の水」。○木落

木々の葉が落ちること。陸游「小江」に「木落ちて月明多し」。○時清 世の中が治まっている。杜甫「峽口二

首(二)」に「時清ければ関険を失し、世乱るれば戦林の如し」。○孤憤 廉直の臣下が佞臣によって意を得

られないために抱くいきどおり。これは奸臣によって忠義をまっとうできず、独り憤懣を抱えるところから命名さ

れた『韓非子』の篇名でもある。「九歌」と対を構成するための措辞。○宵永 秋の夜永。○九歌 屈原の作

とされる「東皇太一」「雲中君」「湘君」「湘夫人」「大司命」「少司命」「東君」「河伯」「山鬼」「国殇」「礼魂」の  
一篇の総称。いづれも『楚辞』に収録。○夜猿 夜に啼く猿。屈原「山鬼」(『楚辞』九歌)に「猿啾啾とし

て又(猿の一種)夜鳴く」。○欲断 はらわたがちぎれんとする。子猿を奪われた母猿が悲しみのあまりはらわ

たがちぎれて息絶えたという『世説新語』黜免に由来する表現。爾来、猿声は悲しみをかき立てるものとして用い  
られる。○女蘿山鬼 ヒカゲノカズラで編んだ帯を着た、山中に住む女の神。屈原の「山鬼」(『楚辞』九歌)に

「人有るが若し山の阿、薜苓を被て女蘿を帯とす」。なお、頸聯は、李商隱「楚宮」に見える「楓樹夜猿愁ひて  
自ら断たれ、女蘿山鬼語りて相邀ふ」の一聯を踏襲した。○五更 一夜を五分した最後の時刻で、午前二時半

～五時頃を指す。○捲卷 書卷を捲き収める。読み終える。○恍 茫然とした様。○心遠 気持ちが俗界を

離れ、『楚辞』九歌の世界にあくがれ出づること。陶淵明「飲酒二十首(五)」(『古文真宝』前集)に「心遠ければ  
地自ら偏なり」。○天南 楚の位置する南方の地のこと。○湘水 湖南省最大の川で、長江の支流の一、湘

江。「九歌」には、湘江の男神・女神を詠じた「湘君」「湘夫人」の二作がそなわる。また、屈原は湘江の支流の汨  
羅に投死した。

【通釈】 この秋風のわびしさをどうしたものか。澄み切った水に木々の葉は落ちて、月明かりが盛んに降り注いで  
いる。治まれる御代ならば、報いられない忠義のために独り憤懣を抱くはずもなく、秋の夜永にはただ『楚辞』の  
「九歌」を口ずさむにうってつけた。楓樹からは夜猿のもの悲しい啼き声がして、はらわたをちぎらんばかりだが、  
ヒカゲノカズラで編んだ帯を着た、山の女神が語りかけて和ませてくれる。真夜中を過ぎて読み終わったが、茫然  
として眠ろうとも思わない。心ははるか南方、楚の湘江の波間にあくがれ出ているのである。

【余説】 頷聯に見える『韓非子』孤憤篇とは、清廉な臣下は必然的に佞臣によって排除され、虐げられるに至ることを説いたもの。また、『楚辭』九歌とは、王逸によれば、屈原が神々に対する敬慕の念を詠じながらも、忠義が報いられず、讒言によって放逐された自身の憤懣を込めたと言われる。黄石がこうした書物に共鳴していたということとは、当時、黄石が藩主や重役に受け入れられず、孤立していた事情をうかがわせる。

大沼枕山は「元人雲中君之詩、短古古雅、多氣韻。此首律而似之（元人の雲中君の詩、短古古雅にして、氣韻多し。此の首は律にして之に似たり）」と評している。「雲中君」は「九歌」の一だが、元代の詩人に同題の作が短篇の古体詩としてあったということだろう。黄石の作は七律で詩体は異なるのだが、これとよく似ているという。

小野湖山は「前後五律、刻在玉池吟社集中。余毎為後進誦之、称其巧練也（前後の五律、刻して玉池吟社集中に在り。余毎に後進の為に之を誦し、其の巧練を称するなり）」と評している。0004詩から0008詩までの七律五首が『玉池吟社詩』に収録されているが、湖山は常日頃これら後進のために誦して、その技巧を褒めていたという。なお、『玉池吟社詩』と比較すると、本作には次のような文字の異同が見られる。

- 3 時清何用懷孤憤↓時清那用懷孤憤
- 4 宵永惟宜誦九歌↓宵永唯宜誦九歌
- 7 五更掩卷恍無寐↓五更捲卷恍無寐

0008 五山翁見訪喜而賦呈（五山翁 訪はる。喜びて賦し呈す）

疎竹蕭颯檐溜鳴      疎竹 蕭颯として 檐溜 鳴る

半宵和雨話平生      半宵 雨に和して 平生を話す

床頭潤透秋絃漫

床頭しょうとう 潤うるひ透とほりて 秋絃しゅうげん漫またり

窓隙風穿夜燭驚

窓隙そうげき 風穿かぜちて 夜燭やしょく 驚おどろく

四海名流才屈指

四海しやうかいの名流なみゆう 才わづかに指さを屈かし

三盃濁酒且伸情

三盃さんはいの濁酒だくしゆ 且まく情のを伸のばす

自嗟短翼無風力

自みづから嗟なげく短翼たんよく 風力かぜりき無なきを

欲就雲鵬学化成

雲鵬うんぼうに就つきて化かせい成まなを学まばんと欲ほす

七言律詩

韻字 鳴・生・驚・情・成（下平声八庚）

【題意】 菊池五山が黄石の宅を訪問したときの作。五山は、天保二年一月に彦根を訪れているが、作中に「秋絃」とあることから、天保二年秋の作と考えられる。江戸詩壇で活躍する五山の驥尾に付して、詩人として飛躍したいとの志がうかがえる。

【語釈】

○蕭騒 風が樹木を吹く音の形容。

○檐溜 軒先からしたり落ちる雨だれ。

○半宵 夜中。 ○床

頭 座布団のあたり。「床」は、ここでは敷物の類いをいうであろう。「頭」はそのあたり一帯を漠然と指す。

○潤透 雨でじつとりと湿り気を帯びること。 ○秋絃漫 秋に奏でられる三味線の音があたりに響いていること。

と。「漫」は、広く行き渡っている様。 ○四海 全国。 ○三盃濁酒 三杯のどぶろく。朱熹「醉下祝融峰作」

に「濁酒三杯 豪気発す」。 ○風力 風量のことだが、能力・気概の意を含む。 ○雲鵬 雲間を飛翔する大鵬

（伝説上の巨鳥）。 ○化成 姿を変えて、進化すること。『莊子』逍遙遊では、鵬は鯤（伝説上の巨大な魚）が変

化して成ったものとされる。ここでは、「雲鵬」の如き五山に付き従って、大詩人に変化を遂げたい、ということ。

【通釈】

まばらに生えた竹はさわさわと風に吹かれ、軒先からは雨だれのしたたる音が鳴っている。夜半まで、雨

音に包まれながら、五山翁と近況を語り合う。座布団まで湿り気を帯びるなか、秋の夜を三味線の音色が冴え渡る。風が窓の隙間から吹き込んで、蠟燭の火が驚いたようにゆらゆらとゆれる夜更け。天下の名流などかろうじて指を屈するぐらいの少ないものだが、そのうちの一人である五山翁とともにどぶろくを何度も傾けて、束の間でも愉快な気分に入ろうと思う。我ながら嘆かわしいのは、自分のような短い翼しか持たぬ未熟者には風を切って飛翔する力もないことだ。雲間を翔る大鵬の如き五山翁の驥尾に付して、大詩人となるべき方法を学びたいものだが。

【余説】大沼枕山は「東西故老凋謝矣。而江湖旧詩人、独翁存焉。才字寓許多尊重之意（東西の故老凋謝せり。而して江湖の旧詩人、独り翁のみ存す。才の字、許多の尊重の意を寓す）」と評している。かつて一世を風靡した江湖詩社も、すでに市河寛齋、柏木如亭、大窪詩仏といった主要メンバーが下世しており、独り五山だけが矍鑠としていた。天下の名流などかろうじて指を屈するほどしかないという表現に、枕山は五山に対する黄石の尊重の念を讀み取ったのである。

なお、『玉池吟社詩』では、詩題を「雨夜五山先生見訪席上賦呈（雨夜、五山先生訪はる。席上賦して呈す）」に作り、また次のような文字の異同が見られる。

- 3 床頭湿透秋絃漫 ↓ 床頭潤透秋絃漫
- 5 四海名流纔屈指 ↓ 四海名流才屈指
- 6 三盃濁酒且舒情 ↓ 三盃濁酒且伸情

0009 二月念一日觀花於天寧寺（二月念一日、花を天寧寺に觀る）

石磴半攀湖鏡開  
石磴半は攀つれば湖鏡開く

山花宛作白雲堆

山花宛として白雲の堆を作す

分明覚入莊嚴界

分明に莊嚴界に入るを覚ゆ

一面瑠璃映発来

一面の瑠璃映発し来たる

七言絶句 韻字 開・堆・来(上平声十灰)

【題意】 天保年間、二月二日に天寧寺で花見をしたときの作。万年山天寧寺は、彦根城の東、約三キロメートルに位置する、曹洞宗の寺院。井伊直中(直弼の実父)によって建立された。丘の上にあつて、城下町や琵琶湖を一望でき、石庭や五百羅漢像などで知られる。後に井伊直弼の供養塔も建てられた。

【語釈】 ○石磴 石の坂道。丘の上にある天寧寺までの道のこと。 ○半攀 石畳の坂道を半分まで上る。 ○湖鏡 晴れ渡る湖面が反射する様を鏡に見立てた表現。 ○山花 山間に咲く野生の花。山桜であろう。 ○白雲堆 白雲が湧き上がる。桜が咲き乱れる様子を湧き上がる白雲になぞらえた。 ○分明 はっきりと。明瞭に。 ○莊嚴界 仏教語。美しく裝飾された伽藍や寺塔、仏像のこと。また、そのような美盛精妙を極めた世界。天寧寺の境内を称えた表現。 ○映発 照り映えること。境内の伽藍や石庭が瑠璃色の空や湖水と照り映えて輝いていたことをいう。

【通釈】 石畳の坂道を半ばまで上ると、鏡のように澄み切った湖面が姿を現した。山桜は咲き乱れて、もくもくと湧き上がる白雲のよう。はっきりと、莊嚴界に足を踏み入れたことを悟った。あたり一面が瑠璃色に照り映えてきたからだ。

0010 (其二)

万念消来参老禅 万念ばんねん消来しょうらいせんとして 老禅ろうぜんに参まゐず

香雲裊裊扠危欄 香雲こううん裊じょうじょうとして 危欄きらんを扠はらふ

此間応是維摩室 此この間かん応まさに是ゆいれ維摩いまの室むろなるべし

故雨天花与我看 故ことらに天花てんかを雨あめらせて 我われに看みしむ

七言絶句 韻字 禅・欄・看 (上平声十四寒)

【題意】 桜の舞い散る天寧寺の境内を、天女が維摩詰らに向けて花を散じたという「天女散花」の世界に重ね合わせて詠じた作。

【語釈】 ○万念 あれやこれやの雑念、煩惱。白居易「晏坐閑吟」に「願はくは禅門非想の定じやうを学び、千愁万念一時に空くうにせん」。 ○老禅 老いた禅僧。鄭谷「贈日東鑑禅師」(『三体詩』)に「老禅の方丈中條ちゆうじやうに倚よる」。

○香雲 瑞雲。長く伸びた枝に咲く桜花を雲に見立てた。李白「尋山僧不遇作」に「香雲山あまねに徧あまねく起たこり、花雨天より来たる」。 ○裊裊 長くしなやかな様。 ○危欄 高い欄干。李商隱「北樓」に「此の樓北望するに堪

ふ、命を軽んじて危欄きらんに倚よる」。 ○維摩室 維摩詰の居所。陸游「夏日四首(二)」に「此の間恐らくは是れ維摩の室ならん、藜床れいじやうを除却して一物無し」。 ○雨天花 天界の仙花をふらせる。如来が菩薩や弟子達を維摩詰

の居所につかわした際、天女が天から花をふりかけたという「天女散花」(『維摩経』観衆生品)に基づく表現。

【通釈】 雑念を振り払おうと、年長けた禅僧のもとに参じる。瑞雲の如き桜がたおやかに高い欄干を扠はらっている。ここはさだめて維摩詰の居所に違いない。ことさらに花を舞い散らせて、私に見せてくれるのだから。

0011（其三）

時方多忌観娯少 時に多忌に方りて観娯少なり

開口笑来能幾場 口を開きて笑ひ来たるは能く幾場ぞ

珍重春風禅榻畔 珍重す春風禅榻の畔

看花尽日世相忘 花を見て尽日世をば相忘る

七言絶句 韻字 場・忘（下平声七陽）

【題意】 藩内で意を得られず、憤懣を抱えていた黄石だが、今回の参詣により、いささか気が晴れたのであった。

【語釈】 ○時 つねづね。折に触れて。 ○多忌 猜疑や忌避されることが多い。王粲「贈文叔良」に「人の忌多

きは、之を掩ふこと実に難し」。 ○開口笑 口を開いて大笑いする。杜牧「九日齐山登高」（『三体詩』）に「人世

逢ひ難し口を開いて笑ふに」。 ○能幾場 いったいどれほどありえようか。「場」は回数を表す数詞。 ○禅榻

畔 禅寺にある長椅子で。杜牧「醉後題僧院」（『三体詩』）に「今日鬢糸禅榻の畔、茶煙軽く颺る落花の風」。

○世相忘 世俗のことを忘れる。押韻のために「相忘世」の語順を倒置したのだが、白居易の「偶作二首（二）」

に「身世交こもも相忘る」とあるように、世俗のことだけでなく、我が身のあれやこれやも含めて、いつさいを忘

れることができたのである。これは、老荘思想において理想とされる「坐忘」に近い境地である。

【通釈】 つねづね周りから白い目で見られてばかりで、心から楽しめることなど滅多になかった。口を開けて大笑

いできるのは、いったいどれくらいあるだろう。ところが、このたびこの禅寺で長椅子に腰掛け、春風に吹かれる

桜を見ながら、ひねもす世俗の一切を忘れていられたのは、まことに近年まれに見るありがたいことであった。

【余説】 「時方多忌」とあるように、黄石が藩内で窮屈な思いをしていたことが、ここでもうかがえる。小野湖山が

「当時君壯年氣鋭、不為同僚所喜、以有此作（当時君壯年氣鋭、同僚の喜ぶ所と為らず、以て此の作有り）」と指摘するように、黄石は同僚の藩士から煙たがられていたのである。

大沼枕山は「昔者誦第三首、以為晚唐正派小杜之流。今又誦之、自喜其見之不誤矣（昔者第三首を誦して、以て晚唐の正派小杜の流と為す。今又た之を誦し、自ら其の見の誤らざるを喜ぶ）」と述べている。語釈に示したように、本作が杜牧の句を巧みに活かした作となっていることをいったものである。

0012 七月十七日与王雲澗新清来広壽堂数人游竹生島（七月十七日、王雲澗、新清来、広壽堂数人と竹生島に遊ぶ）

城隍解纜夜方中 城隍じょうこう 纜じょうを解いて夜方よまさに中す

列宿稀疏澹碧空 列宿りきょく 稀疏きそとして碧空へきうに澄あはし

天待吾曹種奇福 天わ吾わが曹そうを待ちて奇福きふくを種しく

満湖明月満帆風 満湖まんこの明月まんげつ 満帆まんぱんの風

七言絶句 韻字 中・空・風（上平声一東）

【題意】 天保八年ごろ、七月一七日に諸生らと竹生島に遊んだときに作った、七首の連作の一首目。同行した「王雲澗」は、武田庸二郎「三百篇の遺意を得る者」（『漢詩人岡本黄石の生涯』3）によれば、大塚雲澗という人のこと。「新清来」は、後に彦根藩家老となる新野親良（古拙、清来と号す。後、江雪杳と称した）のこと。『黄石齋集』第一集巻上には、「送新清来游京」「寄懷清来在京」「正月十二夜訪新清来」「新清来池亭看螢火」の四首が収録されている。「広壽堂」は、広瀬壽堂のこと。『五山堂詩話』補遺巻四に彦根の詩人が複数紹介されているなかに、その名が見える。竹生島（滋賀県長浜市）は、琵琶湖北部の葛籠尾崎沖南二キロメートルにある小島。島内には都

久夫須麻神社および宝巖寺があり、古来、神の島として信仰を集めてきた。この第一首目は、真夜中の船出の場面を詠じた作で、月と風が出て、幸先よい門出となった。

【語釈】 ○城隍 彦根城の水堀。水堀から琵琶湖に出て、そのまま竹生島まで渡航したのである。 ○夜方中 ち

ようど真夜中である、の意。陸游「秋夜」に「醉魂初めて醒むれば夜方に中す」。 ○列宿 並んだ星座。「宿」

は二十八宿のこと。曹植「公讌」（『古文真宝』前集）に「明月清影を澄まし、列宿正に参差たり」。 ○稀疏

まばらな様。 ○碧空 晴れ上がった空。朱誠泳「中秋喜晴」に「万里の碧空星彩爛たり、満天の涼露月華明ら

かなり」。 ○吾曹 われわれ。「曹」は「輩」「等」に同じ。 ○奇福 すばらしい幸運。龔鼎孳「贈丁野鶴

（一）」に「官罷め身間にして名又た就る、古来奇福本より居り難し」。

【通釈】 城下の水堀に纜を解いて、真夜中に出航した。星々はまばらで、晴れ渡った空にかすかに見える程度。天はわれわれのためにすばらしい幸運を与えてくださった。琵琶湖いっぱい月の明と帆いっぱいの風を。

0013（其二）

冷然宛似御風行 冷然として宛かも風を御して行くに似たり

忽覚心魂揚太清 忽ち覚ゆ心魂太清に揚がるを

憶起当年坡老句 憶ひ起こす当年坡老の句

此游奇絶冠平生 此の游奇絶平生に冠たり

七言絶句 韻字 行・清・生（下平声八庚）

【題意】 連作の二首目。船は湖面を軽快に進み、思わずたましいが浮かれ出そうな心地がした。

【語釈】 ○冷然 軽妙な様。劉禹錫「尋汪道士不遇」に「仙子 東南の秀、冷然として 善く風を馭す」。 ○御風

風に乗って行くこと。蘇軾「前赤壁賦」(『古文真宝』前集)に「浩浩乎として虚に馭り風を御して、其の止まる所を知らざるが如し」。 ○心魂 たましい。「心」は精神をいい、「魂」は、肉体を司る「魄」に対して、精神を

司るものをいう。 ○太清 天空。孟浩然「臨洞庭」(『唐詩選』)に「八月 湖水平らかなり、虚を涵して 太清に混ず」。 ○当年 当時。そのかみ。許渾「咸陽城東樓」(『三体詩』)に「行人問ふ莫かれ 当年の事」。 ○坡老

句 蘇軾の句。結句は、蘇軾の「六月二十日夜渡海」に見える「茲の游奇絶平生に冠たり」の一句を用いた。

【通釈】 舟は軽妙に進んで、まるで風に乗って飛んでいるよう。不意に、たましいが大空に浮かれ出る心地がした。そこでかつて蘇軾翁が詠じた一句が思い起こされた。「この遊行ははなはだ景観がよくて、ここ最近ではもつともすぐれている」という句を。

【余説】 本作の前半は『莊子』を踏まえている。起句は、『莊子』逍遙遊に「夫れ列子 風を御して行く、冷然として善し」とあるのを下敷きにしている。承句の「太清」は、大空のことだが、『莊子』天運に「之を行るに礼義を以てし、之を建つるに太清を以てせり」とあるように、道家思想では天道を指す。軽快に進む船のなかで、黄石は自然と一体化したような気分になったのである。自然との合一は、老莊思想では理想の境地とされる。こうして、黄石は日頃の俗務を離れ、しばしの間、心を休ませることができたようだ。

0014 (其三)

風水冷冷蘆戦戦 風水冷冷たり 蘆戦戦たり

落帆暫倚大浜洲 帆を落として 暫く倚る 大浜洲

漁篝影滅方残夜  
漁篝影滅して方に残夜

太白煌煌当柁楼  
太白煌煌として柁楼に当たたる

七言絶句 韻字 洲・楼（下平声十一尤）

【題意】 連作の三首目。夜が尽きようとするころ、浜洲に舟を着けて、しばし休憩していると、金星が見えた。

【語釈】 ○冷泠 ずしく清らかな様。王安石「木末」に「草根南澗水冷泠たり」。 ○戦戦 ふるえる様。

○落帆 帆を下ろす。船の速度を緩め、停泊すること。許渾「送南陵李少府」に「帆を落とす秋水の寺、馬を駆る夕陽の山」。 ○大浜洲 大きな浜洲。「浜洲」は、中国では見ない言葉。彦根から竹生島にいたるまでには、

「奥の洲」（長浜市）という大きな浜洲があるが、このような浜洲に一時的に停泊したのだろう。 ○漁篝 漁船

のかがり火。 ○残夜 夜の終わり。明けようとする夜。 ○太白 金星。陸游「秋夜泊舟亭山下」に「煌煌たる

太白高さ千丈」。 ○柁楼 舵を操作するところ。操舵室。他より高くなっているのので、楼と称した。白居易「塩

商婦」（「新楽府」）に「飽食濃妝柁楼に倚り、両朶の紅腮花綻びんと欲す」。

【通釈】 風も水も爽快で、蘆が揺れている。帆を下ろして、しばし大きな浜洲に舟を着けた。篝火の光も消えて、ちようど夜が尽きようとするころ、金星がキラキラと輝いて、操舵室に接しようとしていた。

【余説】 湖山は「実境直叙、自成好詩。坡公之流亜（実境直叙、自ら好詩と成る。坡公の流亜なり）」と評している。実際の情景を写実的に描写しているのが、蘇軾の手法に通じることである。

0015（其四）

快艫去追清晓風  
快艫去きて追ふ清晓の風

宿煙半散日瞳矓 宿煙しゆくえん半なかば散じて日瞳矓ひとうろうたり

孱顔一笑如迎掛 孱顔せんがん一笑げいゆう迎掛するが如し

淡掃紅霞立鏡中 淡く紅霞こうかを掃はきて鏡中に立つ

七言絶句 韻字 風・矓・中(上平声一東)

【題意】 連作の四首目。夜が明けて、目の前に現れた竹生島は、薄化粧をして、笑顔で迎え入れてくれる美女のようであった。

【語釈】 ○快矓 軽快に進む舳先。 ○宿煙 昨夜からの霧。 ○瞳矓 太陽が昇り、明るくなってゆく様。楊億

「禁平直」に「初日瞳矓として屋梁に艶つやあり」。 ○孱顔 山の高峻な様。また、そのような山のこと。切り立った

岩壁に囲まれた竹生島(標高一九七メートル)の姿をいう。蘇軾「峽山寺」に「我が行遅速無く、衣を摂とりて孱顔を歩す」。 ○一笑 竹生島が笑顔で迎え入れてくれたように感じられたということ。胡松年「観音院徳雲堂」

に「此の行要するに是れ平生より快なり、無数の青山笑ひて我を迎ふ」。 ○迎掛 客人を迎える際に、両手を

合わせて高く挙げる礼儀作法。 ○紅霞 朝焼け。「霞」は、日の出あるいは日没時の陽光に染められた空や雲を

いう。朝焼けに染められた竹生島を、美女の薄化粧になぞらえた。 ○立鏡 琵琶湖を鏡に見立て、竹生島が湖面

に映っているのを、鏡の前に立ったといひなした。

【通釈】 舟は軽快に進んで味爽の風を追いかけてゆく。夜半からの霧はなかば消えて、太陽が顔をのぞかせてきた。

背の高い竹生島が笑顔で迎え入れてくれたが、その朝焼けの紅を薄く刷いた姿は、鏡の前に立つ薄化粧した美女のようであった。

0016（其五）

城中累歳勞遐想

城中累歳るいさい 遐想かそうを勞す

未得輕舟去一游

未だ得ずいま 輕舟ゆ去きて一游するを

今日有縁償宿願

今日こんにち縁えん有りて宿願つぐなを償ふ

猶疑夢裡到蓬邱

猶なほ疑うたがふ夢裡むり蓬邱ほうきゅうに到るか

七言絶句 韻字 游・邱（下平声十一尤）

【題意】 連作の五首目。竹生島を訪れたいという宿願を果たした黄石だが、その仙界めいた雰囲気は、夢でも見ているのではないかと疑うほどであった。

【語釈】 ○城中 市内。「城」は、本来、都市を囲む城壁をいう。ここでは彦根の城下町のこと。祖詠「終南望餘

雪」（『唐詩選』）に「林表霽色明らかに、城中暮寒を増す」。○累歳 多年。何年間も続いて。○遐想 はる

かかなたへ心を飛ばすこと。また、遠方の地（とりわけ仙郷のような場所）に行ってみたいと考えること。杜甫

「八哀詩（七）」に「紙を操りて終夕 酣たげなり、時物 遐想かそうを集めたり」。○償 満足させること。○蓬邱 蓬

萊山。仙人が住まい、不老長寿の仙薬がある仙山とされ、秦の始皇帝が徐福を遣わしたことでも知られる。

【通釈】 街中で暮らしつつ、もう長い間、あの竹生島に行ってみたいと切に念じてきたが、これまで輕舟に乗って

一遊することはかなわなかった。それが本日、縁があつて、宿願を満足させることができたのだ。それでもまだ、これが蓬萊山にやってきた夢を見ているのではないかと疑っているぐらいである。

【余説】 大沼枕山は「君住湖上、其於竹生島、猶有累年之想。矧余之老憊、而在千里之遠者。蓬邱之游、期再生焉。

今読此首、亦做夢裡一游之想。君之賜多矣（君湖上に住むも、其の竹生島に於るや、猶ほ累年の想有り。矧んや

余の老徳ろうはい、而も千里しかの遠きに在る者をや。蓬邱の游、再生を期するならん。今此の首を読み、亦た夢裡一游の想を做す。君の賜多し」と評している。晩年の枕山は、江戸の地において、竹生島に行くことはかなわぬながらも、本作を読んでその仙郷めいた雰囲気を夢想することができたのである。

0017 (其六)

雲衣影落古壇淨 うんい 影落ちて 古壇きよ

金榜光飛深窟明 きんぼう 光飛んで 深窟あか

剩有天風吹不斷 あまつさ 剩へ天風の吹きて断えざる有り

琿琿宛作歩虚声 そうそう えん 琿琿宛として歩虚の声を作す

七言絶句 韻字 明・声 (下平声八庚)

【題意】 連作の六首目。竹生島に上陸し、寺社仏閣や洞窟を見て回ったが、その間中、風が妙なる音を鳴らして吹いているので、いよいよ仙界に來た心地がされた。

【語釈】 ○雲衣 雲でできた衣。ここでは、単に雲のことをいうが、元來は仙界の住人の衣服を指す。竹生島の神秘性を際立たせた措辭。 ○影落 雲が影を落とす。 ○古壇 古くからある寺社仏閣のこと。「壇」は、宗教活動を行う場所をいう。ここでは、都久夫須麻神社および宝巖寺を指す。 ○金榜 金箔で飾られた寺社の扁額。

○天風 天を吹く風。鮑溶「贈楊鍊師」(「三體詩」)に「夜深けて経尽き人鶴に上る、天風吹いて秋の冥冥たるに入らしむ」。 ○琿琿 玉などが触れあう音。 ○歩虚声 道士が空中を歩行する際に響く誦經の声。魏の曹植が漁山に遊んだ際、空中よりえもいわれぬ妙音を聞いた。音を解するものに写させたところ、神仙の声だという。

その後、道士がこれにならって歩虚詞を作ったという。李白「題隨州紫陽先生壁」に「喘息妙氣を餐し、歩虚真声を吟ず」。

【通釈】 神さびた祭殿には雲が影を落として汚れなく、金箔で飾られた扁額の光は、深い洞窟の奥まで照らしている。その間中、風が絶え間なく天を吹いて、その音はあたかも道士が空中を歩く際の誦經の声のようであった。

0018（其七）

十丈紅塵没馬頭 じゅうじょう こうじん ばとう 十丈の紅塵馬頭を没す

浮生擾擾幾時休 ふせい じょうじょう いくとき 浮生 擾擾として 幾時にか休まん

飄然此日来仙界 ひょうぜん 此こ 日ひ 仙界に 来きたる 飄然として 此の日 仙界に来たる

一碧乾坤洗寸眸 いっぺき けんこん 寸ほん 洗ふ 一碧の乾坤寸眸を洗ふ

七言絶句 韻字 頭・休・眸（下平声十一尤）

【題意】 連作の七首目。俗務に従事する日常を脱し、竹生島までやってきた喜びを歌う。美しい景色に、しばし心を養うことができた。

【語釈】 ○十丈紅塵 十丈の高さまで立ち上る塵埃。繁華の地を指す。ここでは、彦根の城下町のこと。0004

詩に既出。 ○馬頭 馬の頭。往來が激しいため、土埃が馬の頭をおおっているということ。前半は、戴復古「樓

上觀山」（『聯珠詩格』）に「九陌の黃塵馬頭を没し、人來たり人去りて幾時にか休せん」とあるのを踏まえている。 ○浮生擾擾 はかない人生は「たごたご」としてばかりいる。ここは、鄭谷「慈恩偶題」（『三体詩』）の「浮生

擾擾として 竟に何をか能くせん」の一句を用いた。 ○幾時 いつになつたら。「何時」と同じく、時間を問う表

現。杜甫「天末憶李白」に「鴻雁 幾時にか到らん、江湖 秋水多し」。○飄然 世事を気にせず、ふらりと向かう様。欧陽脩「贈許道人」(『聯珠詩格』)に「飄然として鶴に乗り去りて笙を吹く」。○一碧 みどり一色。湖面も天空もすべて碧色に染まっていたのである。范仲淹「岳陽樓記」(『古文真宝』後集)に「上下天光、一碧万頃」。薩都刺「酌江月。任御史有約不至」に「一碧の湖光 三十里」。○乾坤 天地。○洗寸眸 目を洗われた気分になる。すばらしい情景に心を喜ばせること。「洗目」に同じ。「寸眸」は、小さいまなこ。

【通釈】 十丈もの塵埃が馬の頭をおおうまでに立ち上っている。夢のようにはないこの人生は、何かとごたごたとして、いつになったら安らかな時を迎えられるだろうか。ところが、この日、世俗を離れてふらりとこの仙界にやってきて、みどり一色の世界に小さなまなこを洗うことができた。

0019 (其八)

縹渺臨風動悵吟 ひょうびょう かげ のぞ 縹渺として 風に臨んで 悵吟を動かす

琵琶無語白龍沈 びわ こと びやくりゅう しず 琵琶 語無く 白龍沈む

仙童公子今何在 せんどう こうし いま いか 仙童 公子 今 何くにか在る

巖畔空聞風水音 がんぱん くに おと 巖畔 空しく聞く 風水の音

七言絶句 韻字 吟・沈・音 (下平声十二侵)

【題意】 かつて竹生島で琵琶を奏した平経正に思いを馳せるも、そのような風流人もすでに失せて、風と波音だけが響くなかで、人生のはかなさをかみしめた作。

【語釈】 ○縹渺 遠くはるかな様。司馬光「海仙歌」に「祥風 縹渺たり 釣天の声」。○臨風 風に吹かれて。蕭

穎士「九日陪元魯山登北城留別」(『唐詩選』)に「風に臨んで帰心を動かす」。○悵吟 悲しみの吟詠。○琵琶

琵琶無語 琵琶の音も聞こえない。平経正が木曾義仲追討のため北陸道に向けて進軍した際、竹生島に立ち寄り、琵琶を奏した故事を踏まえる。白居易「琵琶行」(『古文真宝』前集)に「今夜君が琵琶の語を聞いて、仙樂を聴くが如く耳暫く明らかなり」とあるように、琵琶の音色は「語」と表現される。童軒「明妃怨」に「琵琶語無く月明孤なり」。○白龍 白い龍。伝説上の生物。『平家物語』巻七では、経正が琵琶を奏したところ「明神、

感応にたへずして、経正の袖のうへに、白竜現じて見え給へり」とある。○仙童 仙人に仕える僮僕。ここ

では、竹生島を仙界に見立て、かつてここにいたにちがいない「仙童」のことをいう。『平家物語』巻七では「彼秦皇・漢武、童男・卯女をつかはし、或方士をして、不死の薬を尋ね給ひしに、「蓬萊を見ずば、いなや帰ら

じ」といって、徒に舟のうちにて老、天水茫茫として 求事をえざりけん蓬萊洞の有様も、かくやありけむとぞ見えし」とある。○公子 諸侯の庶子のことだが、ここでは平家の公達、すなわち、竹生島で琵琶を演奏した

平経正を指す。○今何在 いまどこにいるのか、どこにもいない。杜甫「哀江頭」(『唐詩選』『古文真宝』前集)に「明眸皓齒今何くにか在る」。○巖畔 いわおのそば。竹生島を囲んでいる断崖のあたりのこと。「百年 便ち万年の計を作すも、巖畔の古碑空しく緑苔」。

【通釈】 かなたの風に吹かれていると、思わず悲哀を帯びた歌を口ずさんでしまふ。かつて経正が奏したという琵琶の音も聞こえず、白龍も沈んだままだ。この仙郷にいた僮僕も、あの平家の公達も、いまはどこにもいない。断崖に響く風と波の音がむなしく聞こえてくるだけである。

【余説】 小野湖山は「竹生島湖北名勝、前輩佳詩甚少。余每憾之。今得此数篇、自觉快然(竹生島は湖北の名勝なるも、前輩佳詩甚だ少なし。余毎に之を憾む。今此の数篇を得て、自ら快然なるを覚ゆ)」と評している。

従来、名勝竹生島を詠じた作品にすぐれたものはなかったが、黄石の作を読んで、ようやく満足したという。さらに、「首首如聞歩虚声風水音（首首歩虚の声 風水の音を聞くが如し）」と述べて、本連作はいずれも仙界の雰囲気をたたえているので、神仙の声、風水の音が聞こえてくるようだと評価している。

0020 和横田蕉翁悼亡（横田蕉翁の悼亡に和す）

鸞鏡影昏塵滿床 鸞鏡影昏く塵床に満つ

琵琶絃絶夜淒涼 琵琶の絃は絶えて夜淒涼

枕函難得続残夢 枕函得難し残夢を続ぐを

粉匣空能留旧香 粉匣空しく能く旧香を留む

蟋蟀無情足悲韻 蟋蟀無情にして悲韻足し

芙蓉何事亦啼妝 芙蓉何事ぞ亦た啼妝

西風一掬檀奴淚 西風一掬す檀奴の涙

灑向秋天鬢欲霜 秋天に向つて灑げば鬢霜ならんと欲す

七言律詩 韻字 床・涼・香・妝・霜（下平声七陽）

【題意】横田蕉翁（名は敏、字は敬徳）が亡妻を悼んで作った詩に和した作。「悼亡」は、妻の死を悼んだ作のこと  
で、潘岳の「悼亡詩三首」が有名。横田蕉翁は彦根藩士で、遠城謙道に儒学を講じた。黄石には、「童稚情親莫若君、呼為  
た蕉翁を追悼した「追懷横田蕉翁」詩（『黄石齋集』第六集卷五）がそなわる。そこには「童稚情親莫若君、呼為  
師友事多聞。……無由今日問陳迹、五十餘年茫如雲」とあって、蕉翁とは幼少期より交流があったことがわかる。

『五山堂詩話』補遺卷四には、蕉齋の詩作二首（「首夏林居」「新荷」）が紹介されている。

【語釈】 ○鸞鏡 背面に鸞鳥を描いた鏡をいうが、ここでは単に鏡のことを指す。 罽賓国けいひんの王が鸞鳥を捕らえた

が、三年経っても一向に鳴かなかつた。鸞はつれあいを見れば鳴くから、鏡を見せるよう夫人が助言したので、そのとおりにしたところ、鸞は悲しさのあまりに死んでしまったという「孤鸞照鏡」の故事（『異苑』）を踏まえ、妻に先立たれた横田氏の境遇になぞらえた。白居易「太行路」（『古文真宝』前集）に「何ぞ況いはんや如今 鸞鏡の中、妾が顔未だ改まらざるに 君が心改まるをや」。 ○影昏 鏡が暗くてよく映らないこと。「影」は鏡に映る像。

「昏」は暗い。妻が亡くなり、管理する人もなくなつたので、鏡に埃が積もつて、よく映らなくなつたのであろう。温庭筠「和友人悼亡」に「宝鏡塵に昏くして 鸞影在り」とあるなど、悼亡詩において、鏡が塵によつて映らなくなるといふ表現はよく見られる。 ○床 本来は、坐臥するための長椅子やベンチ、縁台のようなものをいうが、

日本ではそれに当たる家具は室内では使われない。ここでは寢床ねどこのことを指していよう。潘岳の「悼亡詩三首（二）」に「床空しょうむなしくして 清塵ゆたに委ぬ」とあるように、妻が亡くなって使われなくなつた「床」に塵が積もるのは、悼亡詩においては熟套の表現。 ○琵琶絃絶 琵琶に張つてあつた弦も切れてしまつた。ここでも、妻が亡くなつて使われなくなつたことをいう。朱褒「悼亡妓」（『三体詩』）に「断腸す 猶ほ琵琶の絃を繫かくるを」とあるのは、妓女が亡くなって使われることもないのに、まだ絃が張つてある琵琶を見て悲しく感じたというものだが、本

詩ではこれを反転させて、絃が切れたままになつていふといったのである。 ○淒涼 孤独で物寂しい様。 ○枕函 箱枕。 ○残夢 醒めかけの夢。目が覚めて、夢の断片がしばし脳裏にただよつてゐる状態。 ○粉匣 化粧箱。 ○旧香 亡き妻の化粧や香水の匂い。 ○蟋蟀 コオロギ。何景明「寄胡宗器悼内」に「永夜 機中 蟋蟀を

悲しむ」。 ○芙蓉 ハスの花。水芙蓉。 ○啼妝 目の下だけを薄く拭つて、涙痕のように見せる化粧法。ハス

の花の模様を啼妝に見立てた。○西風 秋風。尾聯は、徐恪「朱仙鎮岳王祠」(『明詩綜』)の「西風一掬す賢

を懐ふの涙、荒祠夕照の中に向つて灑ぐ」の一聯を意識するか。○一掬 両手ですくい取る事。秋風が吹い

て、横田氏の涙をすくい取つていったのである。○檀奴 あなた。男性に対する女性からの呼びかけの言葉。も

とは潘岳の小字。潘岳は美男子だったため、道を行けば、婦人たちが果物を投げ入れて車がいっぱいになったとい

う。そこから、「檀奴」は、女性による、夫や恋人、思慕する相手に対する呼称となった。「悼亡詩」を得意とした

潘岳から連想した表現。ここでは、横田氏を指す。○灑 振り撒く。まき散らす。秋雨のことを、秋風が横田氏

の涙をすくい取つて、天に向かつてまき散らしたといひなした。○秋天 秋の空。○鬢欲霜 鬢毛を白髪にさ

せようとする。白髪のことを、秋雨によつて霜が降りたといひなした。

【通釈】 鸞鏡は埃におおわれてうす暗く、寢床にも塵が積もりつばなし。琵琶の絃は切れたままで、淋しい独り寝の夜。箱枕での眠りは浅く、醒めかけた夢の続きを見ることもできない。化粧箱は、益もなく亡妻の残り香を留めている。コオロギは無情にも悲しげな音を盛んに響かせているし、ハスの花はこれまたどういふわけで涙痕じみた模様で咲いているのか。秋風が先立たれた夫の涙をすくい取つて、秋の空に向かつてまき散らしたから、それが鬢毛に落ちて、霜を降りさせようとしている。

【余説】 大沼枕山は「余之集中、有悼亡数首。自以為佳。但比君之詩、則有唐宋之異也(余の集中、悼亡数首有り。自ら以て佳と為す。但し君の詩と比すれば、則ち唐宋の異なるなり)」と評している。同じ悼亡詩でも、枕山と黄石とは、唐詩と宋詩のように異なっているとの指摘である。枕山は、どちらが唐詩風でどちらが宋詩風だと考えていたのだろうか。合山林太郎は、黄石の詩には「枕函難得統殘夢、粉匣空能留旧香」という美麗な句があるため、こちらを唐詩風だとしている(『性靈論以降の漢詩世界』「幕末・明治期における日本漢詩文の研究」)。

小野湖山は「可入樊榭山房集中（樊榭山房集中に入るべし）」と評している。本作は、清の厲鶚（字は樊榭）の詩集に入ってもおかしくないできばえとのこと。頼山陽や梁川星巖も愛読した厲鶚だが、その悼亡詩としては「悼亡姫十二首」が知られている。湖山は本作を清詩風と考えていたようである。

（こざい・ようへい 法学部准教授）